

つ、最後に未収史料が一日も早く何らかの形で活字化される事を、殊に今回原本優先の方針から収録を断念された『歴代古案』等の編纂物の活字化を切望しておきたい。

(A5版 第一巻七六三頁 目錄三三頁  
別冊付録二一九頁 一九八二年三月四  
八五〇円、第二巻八〇一頁 目錄四三頁  
別冊付録一五九頁 一九八三年三月四  
九五〇円、第三巻九八二頁 目錄六一頁  
別冊付録三七頁 一九八四年三月 五一  
〇〇円、新潟県)

(今岡典和 京都大学研修員)

## 高槻市文化財調査報告書 第一四冊

### 『摂津高槻城——本丸跡発掘 調査報告書——』

近年歴史時代の遺跡の発掘が、開発による破壊と裏腹の関係ではあるがとみに盛んとなり、睽目すべき成果を挙げつつあることは周知の通りである。本書はその中でも近世初頭を中心とする特に新しい時代の発掘の成果であり、近世考古学の先駆的業績として注目すべきものと言えよう。一九七五～七六年の発掘当時には石垣の基礎に整然とした松材の木組が発見されたことで話

題となったが、その本格的な報告書が高槻城に関する総合的な研究として刊行され、学界の共有財産となったことは誠に喜ばしい。近世はおろか中世の遺構ですら何の調査もされないまま破壊されることのお多い今日、ここまで事を運ばれた関係者の見識にまず敬意を表したい。なお、本書は調査を担当された一人の、高槻市教委技術吏員森田克行氏によって作成されている。以下本書の内容紹介を試みたい。

第一章「高槻城の位置と概要」では、高槻城の歴史とそれぞれの時期の遺構の概略が示され、高山右近時代の「総郭型」から「郭内専士型」へ移行し、広大な城地を持つに至ったことなどが述べられている。

第二章「調査経過」は、近代以降の城址の変貌と今回の調査の経過の記録。

第三章「遺構」では、典型的な沖積低地であり、「石垣による城壁構築には不向きな地盤」に築かれた石垣の全貌が明らかにされる。多量の栗石と加工木材を組合せた「梯子胴木組」を骨格として造られた人工基盤、松葉敷による足場確保など誠に興味深い。その他、船寄など廃城時の遺構についても触れられている。

第四章「遺物」では、第三章で述べられた「梯子胴木組」の木材をはじめとする「石垣構築にかかわる資材」を中心に、「建物にかかわる資材」など壁土に至るまでの遺物についてまとめられており、木材は勿論、石垣や根固め石の一つ一つについても、法量・岩質・刻印等のデータを一覧表にするという詳細な報告になっている。屋瓦の分類も詳しい。

第五章「考察」では、以上の遺構・遺物について、石垣構築の技法を中心に、化学的な分析なども交えながら考察が行なわれている。前述の「梯子型胴木組」は栗石で掘方の底面が埋めつくされてはじめて機能し、またこの工法はやはり地盤が脆弱な故であり低湿地に築城せんがための施工法であるとされる。また、木材の大きさからその組織的な供給を想定し、穿たれた方形孔から陸送の方法に言及するなど、こうした遺構・遺物が当時の社会の様々な側面に迫りうる材料であることを示唆している。

「組合せ用具」による張糸を使った石垣技法の説明も興味深い。石材についても、規模、形状、矢穴の分析など、特に石垣造りの基本的な技術に関するデータが豊富で、

同種の調査・研究には必ず参照されるべきものとなろう。屋瓦については、高槻城出土のもの分類と編年だけでなく、畿内における近世瓦の成立についても教員を費しており、貴重な研究と言えよう。章末には調査の主要成果である沖積地での石垣基底部の作成技法を復元的に図示してまとめられている。

付論「近世高槻城の修築とその背景」では、文献と石垣の刻印・墨書印から藤堂高虎の関与を推測し、それを大坂城の普請と関係づけているが、概ね妥当な見解であろう。こうした点も石垣の技術など考古学的な資料から裏づけられれば更に面白い。

以上、筆者は所謂「文献」畑の人間であるため、十分な紹介と評価ができていないと思われぬが、よくまとまった高水準の報告書であることは間違いない、詳しくは現物を御覧になっていただきたいと思う。ただ少し欲を言うと、これはひとえにこの種の調査・研究の立ち遅れによるものであろうが、折角のデータが孤立気味で、高槻城の歴史を離れた城郭史、或いは更に中・近世史への広がり乏しく、それら全体の中での位置づけが今一つはつきりしない。

成果の中心である石垣についてももう少し他との比較が欲しいし、また筆者の関心で言えば、第一章で高山右近の総郭型城下町が原型であることを言うなら、それと同時に同じ総郭型の城下町、例えば荒木村重の伊丹城や、或いは最近大規模な総郭の存在が明らかにされた勝竜寺城などとの比較があれば、高槻城の持つ価値が更に明らかになったと思うのである。そうした並行する遺構のデータが揃い、総合的な考察が可能になる日を待ちたい。

ともあれ、考古学の成果が他の分野に裨益するところ大であることは言うまでもなく、今後は「文献」史学者なども、近世史に至るまでこうした成果を活用していくべきであろう。それによって更にこうした遺跡に目が向けられ、保存と調査が盛んになることを期待したい。

(A4版 一五五頁 図版一一〇頁  
別図二枚 一九八四年三月 高槻市  
教育委員会 四五〇〇円)  
(小島道裕 京都大学大学院生)

Noboru Karashima

South Indian History  
and Society, Studies  
from Inscriptions A.  
D. 850—1800

本書は著者辛島昇氏が過去一五年間に発表された九世紀から一八世紀にわたる南インド史、主要にはチャョーラ朝時代のタミルナードゥに関する一三の研究論文を編んで一書としたものである。これらの論文は、もと和文で発表され今回英訳して収録された一編を除き、すべて国際会議や海外の雑誌、国内の紀要、海外学術調査報告書等さまざまな場において英文で発表されたものであり、うち四編はインド人学者と共同して発表されたものである。今回の採録に際して重複箇所を削除や最新の研究成果の吸収など全体の調整と若干の補訂がなされたほか、新しく長文の解説を草し、本書の対象とするところや課題、各論文の位置づけなどを明かにしている。

一三編の論文は、それぞれの内容をよく